

「漱石と広島」の会 会報

第20号

義姉から届いた円本漱石集

会員の田中正道さん(広島大名誉教授)のもとに、思わぬ贈り物が届いたという。大正から昭和にかけて発刊された「円本」の漱石集。当時の空気を味わったという田中さんに、寄稿をお願いした。

熱こもる豊隆の解説

『夏目漱石集』を含む「円本」9冊が、京都の義姉から届いた。父親から引き継いで大切にしていたものという。

小説を安い価格で、と改造社が大正15(1926)年から出版を始めた『現代日本文学全集』(63巻)。1冊1円だったのでもう呼ばれた。届いた漱石集は昭和2(1927)年発行の初版である。



(上)円本・漱石集の冒頭部分
(右)奥付の検印シール。
押印は薄いが「夏目」と読める



巻頭に『吾輩は猫である(抄)が、『道草』が最後に置かれ、13作品が出版年順に掲載されている。

3段組みの体裁は、できるだけ多くの作品を収録するためだろう。天には金箔が施され、購入時には豪華だったと思われる。

編集者の小宮豊隆(漱石の門下生、文芸評論家)による解説と著作年表は、漱石研究家として力あふれるものだった。特に解

親子で読み込まれ 幸福な傷み

写真撮影のため見せてもらった本は、綴じた糸が一部外れるなどかなり傷んでいた。文学全集という「積ん読」「買った読」になるものだが、ここまで読み込まれた跡に、漱石の磁力を見る。

田中さんの義父(妻の父)は商家の長男ゆえに、進学を諦めざるを得なかった。その無念を晴らすように、20歳になるとともに、その年から刊行が始まった円本を買うようになった。

小さな活字で3段組み。今のわれわれ



田中 正道

2024年(令和6年)
10月1日発行
「漱石と広島」の会

説は、編集の基本方針や姿勢を分かり易く伝えるとともに、作品の変容、漱石自身の人生観の推移についても詳しい。

まず『猫』について。なぜ全11章の中で1章から3章だけを選定したか、漱石自身の文章(『猫』上巻の序)が引かれる。

「趣向もなく、構造もなく、尾頭の心元なき海鼠の様な文章であるから、たとひ此の一卷で消えてなくなった所で一向差し支えない」

巻末に究極の人生観

小宮によると、1章と2章は慎ましやかで遠慮がちな作風なのに対し、3章は心持が思い切つて自由になり、書きたいことを思う存分書きまくる感じに変わっている。そこで、最後までこの調子を持ち続けて進んでいると判断したからという。

『道草』を巻末に置いたのは、この作品こそ漱石の究極の人生観、すなわち「醜い現実を憎む心と美しい夢を愛する心」とがより調和の中に止揚された「状態」、つまり則天去私を体現しているからだとする。

奥付には昭和2年6月5日発行とあり、検印シールには夏目の押印がある。調べると、英ケンブリッジ、オックスフォード、エジンバラ、独ベルリン、ハイドルベルク、ミュンヘンの各大学にも同書が入っていた。同じ本を所蔵する身となり嬉しい限りである。

改造社は昭和19年、軍部によって自主廃業を強いられた。まことに残念だった。

くの人の渴望を癒やしただろう。

9冊の中でも傷みが大きく「義父と義姉とで相当読み込んだようだ」という漱石集。1回読んだだけでは何かつかみ残したような気になり、もう1度読まないとはいられないような...。ほかの無傷の本とは違う1冊だったと思われる。

書き手が己の懊悩を投げ込んだような行間に、親子2代の読み手が感応する。幸福な本の姿を見る。

「加計ツアー」(11月16日)募ります

詳細は最終面に